事例①【児童生徒が安心して利用できる環境の整備】

1 設置状況

学校種 義務教育学校	
開室時間 8:15～16:00	
校内教育支援センターの職員について 専属職員数　　1人	

設置する際に工夫した点

・センターには、パーテーションで仕切った個人用スペースを6か所、共同作業のできるテーブルを2台設置し、児童生徒が利用場所を選択して活用できるようにした。人目を遮る目隠しも準備し、個の状況に応じられるようにしている。

・リラックスできるように、簡単な運動（フラフープ、ストレッチ、縄跳び）に使える空きスペースを用意している。

・利用児童生徒一人一人にホワイトボードを用意し、「教室で授業」「オンライン」「自主学習」「休憩」等の活動内容を記したカードを自分で貼り付けながら一日の計画を立てることで、児童生徒の主体性を育むとともに、一日の生活の流れの可視化を図っている。

2 実践事例

事例

一歩を踏み出した A さん

支援内容

5年生に進級後、一度も教室に入ることができずに不登校となった A さんは、家庭でオンライン授業を受けていた。10月に母親と見学に来室し、センター内で給食を食べるお試し利用を行った。その後も給食を食べることを中心に来室を続けた。その間に、他の利用児童生徒の状況が分かったり、担当職員への信頼関係が深まったりしたことに合わせて、祖母の登下校の送迎支援が受けられるようになったことから A さんの定期的な来室が現在も実現している。

具体的な支援内容は、以下のようである。

・教室の仲間との繋がりづくりとして、仲間が届けてくれる給食を自ら受け取る活動の見届け

・オンライン授業における学習材の確認や教室と同時進行でテストや学習プリントに取り組めるように配慮するなどの学習支援

・担当職員との会話を通して、A さんの困り感や気持ちを聞いたり、A さん及び保護者と担任の間に入ったりするなどの情報共有における協力

児童の姿の変容

心理的に高いハードルにならず、気軽に取り組める学習内容を精選して提示してきたことで、成功体験を積み重ね、自己肯定感を高められるようになった。それにより、チャレンジをしようとする気持ち（集会を見学しに行ってみよう・学習用具を教室に取りに行ってみよう・運動をしてみよう等）が芽生えてきた。さらに、センターを利用する同学年の仲間との交流により、人とかかわるときの緊張がゆるみ、さらに仲間と一緒に活動する楽しさを感じている様子も見られるようになった。

児童（保護者）の声

・6年生になったら修学旅行や他の行事に参加したいという気持ちがあるし、楽しみにしている。現在はまだ行事などには参加できないが、「見たい、知りたい」という気持ちがある。

・母親の迎えに来る時間より、「もっと残りたい」と思う日も出てきた。

・母親からは、「センターの利用時間や利用回数が増えたことがうれしい。何よりも家庭ではできなかった学習や仲間との触れ合いもできてよかった。センターで楽しく過ごせているので、安心している。学習状況も知らせてもらえるのでありがたいと思っている。」と言われている。

3 成果と課題

成果

・個々の状況を踏まえ、在籍する児童生徒一人一人との対話によって信頼関係を築き、日常的に頑張りを価値付けたり、困り感や悩みに共感したりして、児童生徒がよりよい生活の仕方を考えることに向かうための支援ができた。

・センターでの生活の仕方を自己決定し、ホワイトボードを使って可視化したことで、やり切ろうとする自己責任感が強くなったり、在籍する児童生徒同士の情報交換に役立てたりすることができた。それにより、自分のことだけでなく、ともに過ごす仲間にも目が向けられるようになった。

課題

・同じ時間にセンターを利用する児童生徒が多くなると、学習や活動をするスペースが狭くなることや、担当職員が、個々の児童生徒に対して十分な関わりができないことがある。

・現在、支援センターは1教室であり、1～9年生までの児童生徒が対象となっている。前期課程と後期課程の日課が異なっていることや、授業内容も幅広いため、一人の支援員では対応が難しいと感じる。

4 今後の方針

・利用を希望する児童生徒に関わる情報（実態、これまでの状況、本人や保護者の願いなど）を児童生徒と保護者、担任、支援センター職員、管理職などが共有する場を設定し、記録を残す。また、定期的な懇談を実施して経過を観察し、個に寄り添った支援につなぐ。

・担任が通室している児童生徒の支援センターでの活動に関心をもって自ら足を運んだり、必要な学習課題の準備やオンライン授業の提供などを話し合ったりするなど、主体的に関わりをもつように働きかける。